

## 第 33 回 新しいブルーカラーの時代

明治大学政治経済学部  
准教授・博士（経済学）

下斗米 秀之

過去何十年間にもわたって、若者にとって大学の学位は高級職への通行証であり、ホワイトカラー職を目指すために不可欠だった。大卒と高卒とでは生涯年収に大きな開きがあり、この賃金プレミアムが大学進学率を引き上げてきた。しかし最近、不透明な経済状況のもとで、若者のキャリアには「新しい選択肢」が広がりつつある<sup>1</sup>。

大学卒業後に就職できず、アメリカの若者が高額な学生ローンに苦しむ状況は良く知られるようになった。従来は安定の象徴とされたコンピュータサイエンスやファイナンス専攻の卒業生でさえも、キャリア形成に苦労している。大卒者の就職難と AI の急速な普及とは無関係ではないだろう。特に「初級知的労働」が人間から奪われつつあり、初級プログラマーの仕事や文書作成、翻訳といった作業も AI に代替されている。これらの変化は金融機関や法律事務所など、多くの分野に及んでいる。金融、証券、IT などの高収入分野でも人員削減が進む中、状況の改善は期待できない。

大卒者が就職に苦戦する中で注目されるのは、「新しいブルーカラー職」である。高学歴であることよりも、専門学校などを卒業し、熟練した労働者として専門的なスキルを持つことを重視する新しいカテゴリーである。半導体や電池などの先端技術を扱う製造工場や、データセンターなどの大規模施設建設は増加傾向にあり、配管や電気、空調など高度な技術を要する施工が求められている。経験豊富な親方が事業を拡大する「ブルーカラー・ビリオネア（億万長者）」も生まれている。アメリカ労働統計局の予測によれば、2020 年から 30 年にかけての新規雇用の約 60%は、大学の学位を必要としない職種になると予測されている。

今後、製造業においてもロボット中心の自動化工場へと移行する見込みだ。しかし高度なトラブルシューティングやメンテナンスなどの問題解決に関わる仕事は、人間の仕事として残る。AI 技術の発展に伴い、大卒者向けの知的な初級職は減少し、大卒の人材はロボット化された製造業などの「新しいブルーカラー労働者」として期待されている。今後は、AI やデータを活用できる技術や現場力を生かした、職人気質の働き方が求められるだろう。現場での、熟練した、物理的なスキルを持つ人材の希少価値がますます高まっている。

事実、アメリカでは職業訓練校へ進む若者の数が増加している。高卒で就職する単純労働者や、大卒・院卒の高度な技術と知識を持つ労働者の間を埋める技能労働者の不足は深刻な状況だ。このスキル・ギャップを埋めるうえでも、高校卒業後の選択肢として、職業訓練校は魅力的な進学先である。ホワイトカラーからブルーカラー職へ転職することで給与が上がるケースも珍しくない。AI やロボティクスに奪われない、あるいは代替できない技能労働職こそが、若者の現実的な選択肢になりつつある。

---

<sup>1</sup> 本稿の執筆にあたって、『Wedge』（2026 年 2 月）の特集「世界を揺さぶるトランプ・パワー 2026 年、分断のゆくえ」に収録された論考を参考にしている。